

英語の付加疑問文の意味論的・語用論的特徴 —日本語の確認の「ね」との比較を通して—

主濱 祐二

1 はじめに

英語の付加疑問文(tag question)では、次の典型的な例(1)のように、「付加部(tag)¹の主語と助動詞は、先行する平叙文(host sentence)のそれと一致する」という統語的特徴が広く見られる。

(1) a. The ship has already left, hasn't it?

b. Aaron doesn't speak Arabic, does he?

先行文が複文(complex sentence)の場合、付加部は(2a)のように従属節でなく主節と一致するのが普通であるが、例外として、(b)のように補文が *I suppose* などの動詞で導入される場合、付加部は従属節と一致することが知られている。

(2) a. Aaron says that Beth has gone to Paris, doesn't he / *hasn't she?

b. I suppose you're not serious, *don't I / are you? (Quirk et al. 1985:811)

複文の付加疑問文については、次節で概観するように、文や述語の意味分析による説明が試みられてきたが、実際に様々な述語について付加疑問形成の可否を調べてみると、先行研究の分析では十分に説明できないケースが見られた。例えば、(3)のように、主語を *I* とした場合、*think* と *be afraid* は、*know* とその補文の付加疑問化の可否について多少異なっている。また、(4)のように、補文が *I think* で導入されても、補文の意味内容によっては付加疑問文にできないことがある。

(3) a. I think that Aaron was angry, *don't I / wasn't he?

b. I'm afraid that Aaron was angry, *aren't I / wasn't he?

c. I know that Aaron was angry, *don't I / ?wasn't he?

(4) I think that Aaron hit me last night, *don't I / ?didn't he?

本稿ではこのような現象に着目し、意味論的・語用論的な観点から英語の付加疑問文の特徴について分析・考察する。意味分析の理論的基盤として、中右(1994)の階層意味論モデル(Hierarchical Semantics model)を採用し、その上で、付加疑問形成と述語のもつ叙実性(factivity)(Kiparsky and Kiparsky 1970)との関係

について論ずる。また、英語の付加部と、それと類似した伝達機能をもつ日本語の終助詞「ね」とを比較し、神尾(1990, 1998)の「情報のなわ張り(Territory of Information)」の観点から、付加疑問文の機能について語用論的な説明を試みる。

2 先行研究

2. 1 階層意味論と付加疑問文形成

ここでは、本稿の理論的前提となっている中右(1994)の階層意味論について概観しつつ、そこで付加疑問文の形成がどのように説明されているか見ていく。

階層意味論では、文の意味は話者の心的態度である「モダリティー(Modality)」と、その内容の真偽が判断できる「命題(Proposition)」という2つの部分を持つ、意味の階層構造を成すと仮定されている。例えば、*Frankly, I think you're making a big mistake.*では、*you're making a big mistake*が命題にあたり、その命題に対する話者の心的態度 *I think* がモダリティーにあたる。*Frankly*「率直に言うと」もモダリティーであるが、これは「大きな間違いを犯していると思うよ」と発言することについての、話者自身の見解である。以上のことを括弧を用いて図示すると、次のようになる。

(5) $[_{M(S)2 D-Modality} \text{frankly } [_{M(S)1 S-Modality} \text{I think } [_{PROP} \text{you're making a big mistake}]]]$

M(S) = Meaning of Sentence (文の意味)、D-Modality = Discourse-Modality (談話モダリティ)、S-Modality = Sentence-Modality (文内モダリティ)、PROP = Proposition (命題)

(中右 1994:15, 69)

D-Modality の典型表現としては *fortunately* や *to tell the truth* などの文修飾語句が、S-Modality としては *I suppose / believe / imagine* などが挙げられる。また、ただ *Aaron made a big mistake.* と言った場合、*I think* のような S-Modality 表現は現れていないが、無標の陳述態度 *I STATE* が S-Modality を占めると仮定されている。

中右は、この意味論の枠組みで、前節で見たような複文の付加疑問文を分析した。例えば、前節の例文(2)の先行文の部分に意味構造を付与すると、次のようになり、

(6) a. $[_{M(S) S-Mod} \text{I STATE } [_{PROP4} \text{Aaron says } [_{PROP3} \text{that Beth has gone to Paris}]]]$. (=2a)

b. $[_{M(S) S-Mod} \text{I suppose } [_{PROP4} \text{you're not serious}]]]$. (=2b)

この意味構造と実際の文に後続する付加部を比べて見ると、それぞれの付加部 *doesn't he?*と *are you?*は、(6)で下線を付した(最も上位の)命題部の主語と述語に対応していることが分かる。以上のような分析から、中右は次の一般原理を導いた。

(7) 付加疑問文の照応原理：付加疑問節は、主文の全体命題 PROP⁴に照応する。
(*Ibid*:169)

(7)は、単文・複文のレベルで広く適用が可能な原理である。しかし、(3c) *I know that...*や(4) *I think that Aaron hit me...*の付加疑問については、この原理をこのまま適用するのは難しい。補文を取る述語や命題の性質について、さらに詳しく調べる必要がある。

2. 2 述語の断定性(assertivity)と叙実性(factivity)

述語の意味と統語現象の関係についての研究は様々あるが、特に述語の意味的性質と付加疑問文の関わりについて論じたものに Hooper(1975)がある。(2)のように、先行文が複文である場合の付加疑問については、Hooper(1975)以来、断定的述語(assertive predicate)と叙実的述語(factive predicate)という2種類の述語のタイプによって説明されることが多かった。

断定的述語とは、補文の表す命題内容が真であると、話し手が肯定的に認める述語のことで、その度合いの高い述語(strong assertive predicate)には *admit*, *say*, *be afraid*、弱い述語(weak assertive predicate)には *think*や *believe*など、そして断定的でない述語(非断定的述語、non-assertive predicate)には *doubt*, *deny*, *regret* などがある。Hooper によると、断定的述語と非断定的述語を区別する統語的規準として、次の例のように、文末に挿入句として生起できるかの違いがある。

(8) *Aaron is coming to the farewell party, I think / *it's likely.*

一方、叙実的述語とは、Kiparsky and Kiparsky(1970)によると、話者が補文の表す命題内容が真であるという前提で(これを叙実的前提(factive presupposition)という)それについて何らかの主張・判断を述べる述語のことで、*know*, *realize*, *regret*などが典型的である。例えば、叙実述語の *regret*と非叙実述語の *believe*では、次例に見るように、「補文の内容が真である」という前提で発話をしているかどうか異なる。

(9) a. I regret that John is ill. (Kiparsky and Kiparsky 1970:159)

b. I believe that John is ill. (*Ibid.*)

(9a)の *regret* の場合、命題「ジョンが病気である」が真であることが前提とされており、それについて「残念だ」と話者の見解が述べられているが、(b)の *believe* の場合は、「ジョンが病気である」ことが真であるとは言えず、その命題内容について話者が「確からしいと信じている」と述べているに過ぎない。ここまで見てきた断定・叙実述語の分類を Hooper(1975:92)の分類に従って整理すると、表1のようにまとめられる。

	叙実的(Factive)	非叙実的(Non-Factive)
断定的(Assertive)	<i>find out, know, realize...</i> (半叙実的(Semi-Factive))	Weak: <i>think, believe, suppose...</i>
		Strong: <i>admit, say, be afraid...</i>
非断定的 (Non-Assertive)	<i>regret, forget, be odd...</i>	<i>be likely, doubt, deny...</i>

表1. Hooper(1975)の断定・叙実述語の分類

Hooper は、述語の断定性・叙実性と付加疑問文形成との関わりについて、「付加部が補文と一致するのは弱断定的述語の場合で、半叙実的述語(叙実的・断定的述語)にもいくつかの特徴を示すものがある」(Hooper 1975:103)と指摘している。上の表で言うと、網掛けをした部分の動詞が補文と付加部の一致を許しうる動詞ということになる。以下に、彼女の例をいくつか挙げておく。

(10) a. I suppose the Yankees will lose again this year, won't they? [弱断定的]
(Hooper 1975:103)

b. *I agree that the stew isn't cooked yet, is it? [強断定的] (*Ibid.*)

c. I notice he has had a face lift, hasn't he? [叙実・断定的(半叙実的)]
(Hooper 1975:118)

d. *I'm sorry it stopped snowing, didn't it? [叙実・非断定的] (*Ibid.*)

確かに、弱断定述語と半叙実述語の場合で付加部と補文との一致が見られる。しかし観察の幅を他の述語にも広げてみると、必ずしも彼女の一般化が当てはまるわけではないようである。この点については第4節で詳しく論ずる。

2. 3 英語の付加疑問と日本語の終助詞「ね」

2. 3. 1 付加疑問の伝達機能

Quirk et al. (1985:811)によると、英語の付加疑問には話者の発言に対する聞き手の応答を促す(invite listener's response)機能があり、聞き手の応答の内容に対する話者の期待が付加部のイントネーションに反映される。彼らはこれを“Assumption + Expectation”という2つの要因で説明している。例えば *He likes his job, doesn't he?*↑と *He likes his job, doesn't he?*↓ (矢印の向きは上昇・下降調を示す) では、どちらも先行文が“I assume he likes his job”という話者の推定を表すが、前者の上昇調は話者が聞き手の返答が肯定・否定のどちらでも構わないと思っている(neutral expectation)ことの表れであり、その一方で、後者の下降調は聞き手の応答が肯定であることを期待している(positive expectation)ことの表れであるという。言い換えれば、前者の機能は、話者自身の推測している内容の真偽についての「確認」であり、後者には話者の推測が正しいと「同意」してもらうことを要求する機能がある。

2. 3. 2 情報のなわ張り理論における「ね」と付加疑問

日本語の終助詞「ね」には、英語の付加疑問と同様に「確認」と「同意」という機能があり、またその他にも様々な機能があることが指摘されている(cf 大曾2005)。この「ね」については、神尾(1990, 1998)が「情報のなわ張り理論(Theory of Territory of Information)」の枠組みで、興味深い研究を行ってきた。神尾(1998)によると、同意の「ね」は話し手と聞き手が情報を共有している場合に現れ、次の(11a)がその典型例である。

(11) a. よく降るねえ。 [同意] (神尾 1998:22)

b. (*)わたしの旧姓は青木でしたね。 (神尾 1998:52)

c. このペンは、青木さんのですね。↑ [確認]

(11b)では、「私の旧姓が青木だ」ということは聞き手と共有できる情報であるとは考えにくいので、普通「ね」は使われない。(11c)の確認の「ね」は、上昇調のイントネーションを用いて聞き手に確認しているので、話し手にとっては不確かな情報(ここでは、「このペンは青木さんのである」ということ)でも、聞き手にとってはその真偽がわかる(と話し手が想定している)情報について述べるとき使われる(神尾 1998:49)。

ここでは情報のなわ張り理論の説明は最小限にとどめるが、「ある情報が話し手(S)や聞き手(H)のなわ張りにある」とは、その情報が話し手・聞き手自身に深く関わるものであるか、その内容についてかなりの程度理解している情報のことであ

る。今、「完全に知っている」を1、「全く知らない」を0とし、両者の間になわ張りの境界点 n をとると(1... n0)、(11a)の情報は $S=H=1$ 、(b)は $S=1$ かつ $H=0$ 、(c)は $H>n>S$ と表すことができる。神尾は、この図式をもとに、様々な「ね」の用法を視野に入れて、次のような仮説を立てている。

(12) 「ね」は $H>n$ の場合に用いられる要素である。(神尾 1998:50)

つまり、「ね」は話し手の発信した情報が聞き手のなわ張りの範囲内である(と話し手が想定できる)場合に使われる、ということである。

神尾は、英語の付加疑問についても同様に考察を加えており、それが使われる状況について次のように指定している。

(13) a. $n \leq S < H$ (神尾 1998:62)

b. *That's Yamada, isn't it?* (神尾 1998:67)

That's Yamada. で言い切れば $S=1$ であるが、付加部 *isn't it?* より話し手の情報に対する不確かさが表され、1から0の方へ移動する。話し手は聞き手がその情報についてよく知っていると思っているので、 $H>n$ であり、かつ $H>S$ となる。(13a)の図式は、(12)の「ね」の条件($H>n$)を満たしており、また(11c)の確認の「ね」の図式($H>n>S$)と似ている。

以上、付加疑問文について意味論的・語用論的な観点から論じた先行研究を概観してきた。そこで、次節以降、実際に様々な述語を含む英語・日本語の文について、付加疑問が可能か、あるいは「ね」が文末に付き得るかを調べ、先行研究の分析の妥当性を検証していく。

3 英語の付加疑問と日本語の「ね」についての調査

日本語の「ね」と比較しながら、英語の付加疑問文の意味的・語用論的特徴を探り、また先行研究の分析の妥当性を検証するため、付加疑問と「ね」について調査を行った。この節ではその調査結果を、インフォーマントによるコメントを交えながら報告していく。

3. 1 調査の方法

全部で20の英文を作り(単文9、複文11)、英語母語話者²にインフォーマントとして協力してもらい、付加疑問形成の可否を判断してもらった。また、それぞれの英文を、確認の「ね」で終わる日本語に訳し、日本語話者数名にもそれぞれの日本語の文が言えるかどうか判断してもらった。英文・和文ともに、それぞれの文にコンテキストは指定しなかった。従って、インフォーマント各自に、それ

ぞれの文を発話するコンテクストを考えながら、自分が話し手になった場合に言えるかどうかを判断してもらった。

3. 2 調査結果

3. 2. 1 単文

まず、単文について、主語が *I* の場合と三人称単数の *Aaron* の場合を比較してみる。

(14) a. *I am angry, aren't I?

a'. *私は怒っていますね。

b. Aaron is angry, isn't he?

b'. アーロンは怒っていますね。

(14)は *be angry* (怒っている) の例であるが、主語が *I* (私) である(a), (a')の場合は英語・日本語ともに非文で、一方で主語が *Aaron* (アーロン) である(b), (b')の場合は全く問題ない。*be angry* を *happy* (幸せだ) や *sick* (具合が悪い) に変えても、同様の結果が得られた。(14a)は話し手自身の心身の状態について述べたものであったが、次の(15)のように話者自身の好みや生年など個人的な情報を述べる場合も、付加疑問は英語・日本語ともに不自然になる。

(15) a. *I like modern art, don't I?

a'. *私は現代美術が好きですね。

b. ?I was born in 1981, wasn't I?

b'. ?私は 1981 年生まれですね。

(15a)(a')については、述部を *love Mary* (メアリーを愛している)、*hate carrots* (ニンジンが嫌いだ) などに変えても、結果は非文であった。(b)(b')の判断が?なのは、インフォーマントによると、「例えば履歴書に記入するときなど、自分が西暦で何年生まれであったか忘れてしまったとき、それを知っている自分の家族や、誰か自分の年齢を知っている人に尋ねる」という場面を設定すれば、(15b)(b')を用いる場合が考えられるからである。

I (私) に限らず、次例(16)が示すように、話し手の身近な人物に関する情報を述べる場合も、付加疑問や「ね」は使えないようである。

(16) a. ?My brother is 35 years old now, isn't he?

a'. *私の兄は今 35 歳ですね。

b. ?My brother works in a factory, doesn't he?

b'. *私の兄は工場で働いていますね。

I (私) やその身近な人物の情報の他にも、(17a)(a')(b)(b')のように、話し手自身が何らかの行為をした、またはされたことを述べる場合も、付加疑問や「ね」は生じにくい。(17c)(c')のように、表される行為に話し手が関与していない場合は、英語でも日本語でも全く問題ない。

(17) a. ?I hit Aaron last night, didn't I?

a'. ?私は昨夜アロンを叩きましたね。

b. ?Aaron hit me last night, didn't he?

b'. ?アロンは昨夜私を叩きましたね。

c. Aaron hit you last night, didn't he?

c'. アロンは昨夜あなたを叩きましたね。

インフォーマントによると、(a)から(b')の発話が可能なのは、例えば「前日の夜に飲み会があって、飲みすぎたせいでその時の記憶がほとんどない。翌朝起きてみると、なぜか分からないが拳が痛い(または頬が痛い)。そこで、飲み会に居合わせた友人に尋ねてみた」という状況である。

3. 2. 2 複文

次に、複文に続く付加疑問と「ね」について見ていく。はじめに、*tell* (言う)の例を見てみよう。

(18) a. I always told you that I was angry, didn't I / *wasn't I?

a'. 私はいつもあなたに、自分は怒っていると書いていましたね。

b. I always told you that Aaron was angry, didn't I / *wasn't he?

b'. 私はいつもあなたに、アロンは怒っていると書いていましたね。

(18)から明らかなように、「私はあなたにいつも言っていた」ということについては、付加疑問や「ね」を用いて聞き手に確認ができる。しかし、(18a)(b)で **wasn't I?*、**wasn't he?*であることから、言った内容(複文)については、付加疑問でその真偽を確認することはできない。試みに、日本語でも「ね」で補文の内容を問う文(18a')(b')を作って判断してもらったが、やはり非文である(ここでは「そう」が[]の内容を指すと考え、同一指標_iを付けておく)。

(18) a'. *私はいつもあなたに、[自分は怒っている]_iと書いていましたが、そう_iなんですね。

b'. *私はいつもあなたに、[アロンは怒っている]_iと書いていましたが、そ

う_iなんですね。

次に、*think* (～と思う) や *believe* (～と信じている) などの動詞の場合を見てみよう。

(19) a. I think (believe / suppose / doubt) that Beth secretly confessed her love to Carl, *don't I / didn't she?

b. I am afraid that Beth secretly confessed her love to Carl, *aren't I / didn't she?

c. *私は、ベスが密かにカールに愛を告白したと思って(推測して/信じて/疑って/心配して)いますね。

d. 私は、[ベスが密かにカールに愛を告白した]_i と思って(推測して/信じて/疑って/心配して)いますが、そう_iなんですね。

(19a)(b)から、*I think* や *I am afraid* の部分から付加部を作ることはできないが、その補文から作ることが可能であることが分かる。「ね」については、(c)のように「私は...思っていますね」と確認することはできないが、(d)が示すように推測している内容について確認することは可能である。

(19)の主語を第三者の *Aaron* に変えたものが、次の(20)である。

(20) a. Aaron thinks (supposes / believes / doubts) that Beth secretly confessed her love to Carl, doesn't he ^mdidn't she?

b. Aaron is afraid that Beth secretly confessed her love to Carl, isn't he ^mdidn't she?

c. アーロンは、ベスが密かにカールに愛を告白したと思って(推測して/信じて/疑って/心配して)いますね。

d. アーロンは、[ベスが密かにカールに愛を告白した]_i と思って(推測して/信じて/疑って/心配して)いますが、そう_iなんですね。

(19a)(b)と異なり、(20a)(b)では付加部は先行文の主節(*Aaron thinks* など)の部分と一致し、補文のとは不可能ではないが一致しにくい。また、(20c)(d)から分かるように、「ね」を用いて「アーロンは...思っていますね」と確認することもでき、アーロンが推測している内容について確認することもできる点で、(19c)(d)の例と異なる。

同様に、*know* (～を知っている) や *be aware* (～に気が付いている) についても、主語を *I* と *Aaron* にして比較してみよう。

(21) a. I know (realize / regret) that Beth secretly confessed her love to Carl,
*don't I /*didn't she?

b. I am aware that Beth secretly confessed her love to Carl, *aren't I
/*didn't she?

c. *私は、ベスが密かにカールに愛を告白したことを知って(に気が付いて/を
残念に思っていますね。

d. 私は、[ベスが密かにカールに愛を告白した]_i ことを*知って(に気が付い
て/*を残念に思っています)が、そう_i なんです。

(22) a. Aaron knows (realizes / regrets) that Beth secretly confessed her love to
Carl, doesn't he /*didn't she?

b. Aaron is aware that Beth secretly confessed her love to Carl, isn't he
/*didn't she?

c. アーロンは、ベスが密かにカールに愛を告白したことを知って(に気が付
いて/を残念に思っています)。

d. アーロンは、[ベスが密かにカールに愛を告白した]_i ことを知って(に気が
付いて/を残念に思っています)が、そう_i なんです。

(21a)(b)では、付加部は先行文の主節にも従属節にも一致することができないが、
主語を *Aaron* に変えた(22a)(b)では、主節にのみ付加部を一致させることができ
る。次に示すように、*deny* や *admit* の複文も、(22a)(b)と同様の結果を示した。

(23) Aaron denies (admits) that he attempted to murder his wife, doesn't he
/*didn't he?

「ね」については、(21c)のように「私は...を知っていますね」と確認することは
できないが、主語がアーロンであれば、(22c)(d)のように「アーロンは...を知っ
ていますね」とも、アーロンが知っている内容についても確認することができる。

以上、様々な述語を含む英語・日本語の文について、付加疑問と確認の「ね」が
付くことができるかを見てきた。次の節では、ここで提示したデータをもとに、
先行研究の分析が当てはまるか検討し、意味論・語用論の観点からの説明を試みる。

4 分析と考察

4. 1 付加疑問と情報のなわ張り

はじめに、3. 2. 1 で見た単文について、情報のなわ張りの観点から考察し
ていきたい。

(14)から(17)の例では、英語の付加疑問が不可能な場合、それに対応する日本語訳に「ね」を付けることができなかった。これは、言うまでもなく、英語や日本語という言語の違いを越えた、語用論的な原理がそこに働いていることの表れである。その原理が、2. 3節で概観した「情報のなわ張り」である、とここでは仮定して、考察を進める。

(14a) *I am angry*や(15a) *I was born in 1981*などの情報は、話し手自身の情報であり、聞き手は普通知りえない情報であるので、両者の間に $S=1, H=0$ の関係が成り立っている。話し手自身の情報ではないとは言え、(16a)の *My brother is 35 years old now*は、話し手が知っているのが普通である情報であり、他人には知りえないものなので、これについても、 $S=1, H=0$ が成り立つ。

(17a)の *I hit Aaron last night*, (17b)の *Aaron hit me last night*.については、話し手が叩いた場合だけでなく、叩かれた側である場合も、直接的にそれを経験しているので、 $S=1$ で、自分の経験したことについて聞き手は知るはずがないので、 $H=0$ である。付加疑問で問う場合も、「ね」を使う場合も、(12)(13)で見たように、最低限 $H>n$ (その情報が聞き手のなわ張りにある) が前提となっているから、以上の例が示す状況では付加疑問や「ね」は使えないことになる。

一方で、(14b)が自然な発話であるのは、*Aaron is angry*.は話者が直接知覚・経験できることではなく、それを推測するしかないので、 S は n に近いか、あるいは n 以下である。聞き手は、話し手に尋ねられているので、 $H>n$ で、かつ $H>S$ と考えるのが普通であるから、英語であれ日本語であれ、この場合は(12)と(13)の図式に当てはまる。

インフォーマントが指摘していた、(17a) *?I hit Aaron last night, didn't I?*が可能である状況も、同様に説明がつく。「前日の夜に飲み会があって、飲みすぎたせいでその時の記憶がほとんどない」「翌朝起きてみると、なぜか分からないが拳が痛い」から、 S は n に近いか、あるいは n 以下であることが推測される。「飲み会に居合わせた友人」は出来事の一部始終を見ていたはずであるから、 $H=1$ か、少なくとも $H>n$ である。*I hit Aaron last night*.は、十分聞き手のなわ張りにある情報であるから、付加疑問や「ね」が付くことが可能である。

情報のなわ張りによる説明は、4. 3節で触れる叙実性についても応用できるので、後で再度言及する。

4. 2 意味構造による分析の適用可能性

次に、3. 2. 2節で見た複文と付加疑問について考察していく。

2. 1節で見たように、中右(1994)は次のような付加疑問文の照応原理を提示

していた。

(24) 付加疑問文の照応原理: 付加疑問節は、主文の全体命題 PROP⁴に照応する。
(=7))

この原理により、例えば *I suppose you're not serious, are you?* は、(6)のように先行文の意味構造を用いて、

(25) [M(S) S-Mod I suppose [PROP⁴ you're not serious]], are you?

と分析され、付加部は *I suppose* を除く命題部と一致すると説明されていた。この説明は、3. 2. 2節の(19)で見た *I think / believe / suppose / doubt / am afraid that...*の付加疑問にも当てはまる。例えば *I doubt that...*の付加疑問は、意味構造を用いて次のように分析できる。

(26) [M(S) S-Mod I doubt that [PROP⁴ Beth secretly confessed her love to Carl]],
*don't I / didn't she?

しかし、(21)のような、*I know / realize / regret / am aware that...*の複文の場合はどうであろうか。これらの述語は命題に対する話者の態度を表すので、意味構造上は文内モダリティ(S-Modality)に属すると考えられるが、(25)や(26)と同様に分析しても、付加部と命題部の一致について正しい結果が得られない。一つ例を挙げて、*I realize that...*の付加疑問文について意味構造による分析を試みると、次のようになる。

(27) [M(S) S-Mod I realize that [PROP⁴ Beth secretly confessed her love to Carl]],
*aren't I / *didn't she?

従って、(21)の述語については、文内モダリティに属するものの、*suppose* や *doubt* などと同様に意味構造を用いて付加疑問文形成を説明することができない。

4. 3 述語の叙実性と付加疑問文形成

ここで、Hooper の断定・叙実述語の分類をもう一度見てみよう。下の表2は、2. 2節の表1と同じもので、網掛けをした部分は、主語が1人称の場合に補文と付加部の一致を許しうる述語を示しているが、それに加えて、本稿の3. 2. 2節で示した複文に後続する付加疑問の調査結果も反映させてある。例えば、取り消し線のある語(WORD)は付加部が補文と一致しなかったもの、囲みのある語(WORD)は付加部が補文と一致したものを示している。

	叙実的(Factive)	非叙実的(Non-Factive)
断定的(Assertive)	<i>find out, know, realize...</i> (半叙実的(Semi-Factive))	Weak: <i>think, believe,</i> <i>suppose...</i>
		Strong: <i>admit, say, be</i> <i>afraid...</i>
非断定的 (Non-Assertive)	<i>regret, forget, be odd...</i>	<i>be likely, doubt, deny...</i>

表 2. Hooper(1975)の述語の分類と本研究の検証結果

網掛けに含まれている *think* などの弱断定述語は、確かに補文と付加部が一致することが検証できた。しかし、*know* や *realize* は、網掛けに含まれているものの、今回の検証では補文と付加部が一致しなかった。

同様に、網掛けに含まれていない部分（つまり、補文と付加部が一致しない述語）を見ると、叙実的・非断定的述語の *regret* については、補文と付加部は一致しないことが確かめられた。しかし、*think* などを除く非叙実的述語を見ると、*be afraid* や *doubt* も、補文と付加部が一致する述語であることがわかった。本研究では Hooper の挙げている述語全てについては確認できなかったが、検証の結果から、「弱断定的述語と半叙実的述語が、補文の要素と一致する付加疑問を形成しうる」という彼女の指摘には、まだ再考の余地が残されていると言える。

表 2 の述語を、叙実的/非叙実的(factive/non-factive)で 2 分すると、補文と付加部が一致しない述語は叙実的述語の項目に、一致する述語は非叙実的述語の項目に集中して分布していることが分かる。これは偶然このような分布になったのではなく、意味論・語用論的な要因が関係していると考えられる。

know や *regret* などの叙実的述語は、2. 2 節でも見たように、「補文の命題内容が真だという前提で、話し手が何らかの主張・判断をする述語」と定義されている。一方で、*think* や *doubt* などの非叙実的述語を用いる場合は、「補文の命題内容は真である」とは述べておらず、むしろ話者はその真偽について推測したり、疑問を持ったりしている。従って、付加疑問を用いて補文の命題内容の真偽を確認するとき、話者が叙実的述語を用いている場合は、その内容が真だと確信して話しているのだから、そもそもその真偽を聞き手に問うこと自体不自然である。逆に、話者が非叙実的述語を用いている場合は、補文の命題内容が真であることが確かではないのだから、付加疑問を用いてそれを確認するのは、ごく自然なこ

とであると言える。

このことは、4. 1節で単文の付加疑問の分析で用いた情報のなわ張りの観点からも同様に説明できる。英語であれ日本語であれ、*find out that ...*や「～を残念に思う」などの叙実的な表現には、「話者が、実際に見たり聞いたりして、補文の表す内容が真であるということを知っている」という含意があるので、補文の表す情報は「話者のなわ張りにある情報」と言うことができる。つまり、補文の情報について $S=1$ あるいは $S \geq n$ が成り立っている。自分の持つ情報がなわ張りの中にあるとき、通例その真偽を聞き手に確認することはないので、(1人称主語で) 叙実的述語の補文の内容は付加疑問にできないといえる。ましてや、*I find out / know / realize* 「私は～と分かる/知っている/気がつく」などの主節部分は、話者本人しか知りえない思考作用の部分なので $S=1$ であり、付加疑問で聞き手に問うことは当然できない。

think / suppose / believe などの非叙実的述語については、述語によって話者の推論の強さの差はあるものの、話者にとって補文の情報の真偽が不確かであるので、 $S < n$ と考える。従って、付加疑問を用いて補文の真偽を確認することができる。ただし、*tell / say / admit / deny* などの動詞についてはこの限りではなく、「実際に発言したり文書化したりすることで態度を表明するような行為的動詞は、補文の情報を $S=1$ または $S \geq n$ と指定するので、補文の内容について付加疑問で問うことはできない」と仮定しておく。

5. まとめ

以上本稿では、英語の付加疑問の意味論的・語用論的諸特徴について、日本語の終助詞「ね」との比較を通して考察してきた。最後に本稿の主張をまとめると、次のようになる。

- ① *I hit Aaron*の主語 *I*や、*Aaron hit me*の目的語 *me* は、その文が表す出来事に話者が関与していることを示す「なわ張り表現」なので、 $S=1$ となり、付加疑問化を許さない。
- ② 中右の階層意味論 ($ls\text{-MOD I VP [PROP that NP VP]]$)で言う文内モダリティー ($S\text{-Modality}$)には、「叙実的」「非叙実的」の2つの分類があり、このうち補文と付加部の一致を示す非叙実的述語である。
- ③ 叙実的述語と、それに加えて非叙実的述語のうち行為的なものは「なわ張り表現」($S=1$ あるいは $S \geq n$)である。従って、補文と付加部の一致を許さない。

注

- 1 本稿では、McCawley (1988:247)にならって、先行文+付加部の全体を付加疑問文と呼ぶことにする。
- 2 英語教育講座の外国人教師の先生と、アメリカからの留学生に協力してもらった。どちらも米語話者で、男性である。

<参考文献>

- 大曾美恵子 (2005) 「終助詞「よ」「ね」「よね」再考—雑談コーパスに基づく考察—」『言語教育の新展開』ひつじ書房。
- 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論』大修館書店。
- 神尾昭雄・高見健一 (1998) 『談話と情報構造』研究社出版。
- 中右実 (1994) 『認知意味論の原理』大修館書店。
- Hooper, J.B. (1975) "On assertive predicates," in J.P. Kimball (ed.), *Syntax and Semantics* 4, 91-124. New York: Academic Press.
- Kiparsky, Paul and Carol Kiparsky (1970) "Fact," in Manfred Bierwisch and Karl E. Heidolph (eds.) *Progress in linguistics*, 143-173. The Hague: Mouton.
- Lyons, John (1977) *Semantics* 2. Cambridge University Press.
- McCawley, J.D. (1988) *The syntactic phenomena of English*. University of Chicago Press.
- Quirk, Randolph et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.

(平成 19 年度修了生、岩手県立盛岡北高等学校教諭)